

序

近年、わが国の医療を取り巻く環境は大きく変化している。少子高齢社会を迎え、それに伴い国民医療費は増加の一途をたどっており、このままの状態では将来の医療財源の確保に不安があることも予測されている。また、医療費の問題のみならず、多発する医療事故や産科医師不足、救急医療体制、医療従事者に対する患者のモラルの低下など、医療に関連する問題は山積しており、医療を提供する側、受ける側が一体となって対策を講じる必要がある。このような医療機関を取り巻く外部環境の劇的な変化の流れの中で、そこで仕事をする医療従事者の意識や業務内容も大きく変化しつつある。

翻って病院における薬剤師の業務を振り返ってみると、昭和63年4月に入院調剤技術基本料（現・薬剤管理指導料）として、薬剤師が入院患者に対して薬学的サービスを提供することにより診療報酬上で100点の算定が認められた。算定の要件は服薬指導、薬歴、注射薬セット、情報提供の4本柱であり、これを機に病院薬剤師の業務内容が大きく変わったのは言うまでもない。すなわち、20年余りの間に物質志向、技術志向であった調剤世代から、患者志向のクリニカルファーマシー世代、そして、ファーマシューティカル・ケアの世代へと目まぐるしく変化してきた。

そして、現在、薬剤師の活動が病院の管理、運営の適正化に対して成果が期待される新しい世代へと引き継がれていくようにも見えるが、これらの世代をまたいで変化しないことがあることも忘れてはならない。それは、医薬品の有効性、安全性、経済性を確保するという薬剤師の使命であり、そこには常に患者サービスの視点が存在するということである。いま、薬剤師はその職能を大いに発揮すべき時代が到来したといっても過言ではないだろう。

このような中で、病院薬剤師は医薬品、特に注射薬の知識や手技、

技術を大いに駆使して患者サービスに貢献しなければならない。注射薬の適正使用を推進し、患者の安全を担保し、医薬品の有用性が確実に確保されるよう努力すべきである。このような時代背景を見越して、注射薬に苦手意識のある薬剤師、注射薬の勉強を進めたい若い薬剤師に学習していただくための教科書として本書を企画した。配合変化に関する書籍は、すでに数多く出版されているが、本書は初学者にむけて、大学で学んだ基礎知識をベースに、学術根拠を含めて学べるよう、そして得られた知識を実践できるよう紙面構成を工夫した。

本書を片手にした薬剤師が、病棟や在宅医療の場で大いに患者サービスの提供に励み、そして患者の利益につながる活動をするよう期待している。

2009年 3 月

済生会横浜市東部病院 薬剤センター

赤瀬朋秀